

雨の季節になると思い出す

雨の季節になると室生犀星の詩を思い出します。

室生犀星「雨の詩」

雨は愛のやうなものだ
それがひもすがら降り注いでみた
人はこの雨を悲しさうに
すこしばかりの青もの畑を
次第に濡らしてゆくのを眺めてみた
雨はいつもありのままの姿と
あれらの寂しい降りやうを
そのまま人の心にうつしてみた
人人の優秀なたましひ等は
悲しさうに少しつかれて
いつまでも永い間うち沈んでみた
永い間雨をしみじみと眺めてみた

雨によって、日頃の喧騒が少し落ち着きます。植えたばかりの野菜の苗が、ほっと息をついているのがわかります。また日が照るようになると、雑草が勢いづくのも予想されます。

それでも今日は、一日落ち着いて、雨の流れるのを見つめていることができます。

近年、様々な天候の異変によって、昔ながらの季節の移り変わりまでも予想できないものとなっています。4月中旬になっても、雪が積もって桜の花が凍えていたり、5月なのに35度を超える日が続いたり、身体が追いついていけないので、胃腸が痛んだり皮膚炎になったり、生徒たちも元気を出して過ごしていますが、今後の展開が予想できません。

夏の準備をしなければと思います。闘いの夏がやってきます。

しかし、今日限りは、ゆっくりとお茶でも飲んで、読書の時間を持つことにしましょう。4月から走り続けています。あと10か月を切りました。

6月15日は、ワシントンホテル椿山荘で同窓会総会、6月22日は、大阪で関西磐城高校同窓会です。